竹中ナミ　Nami Takenaka

1948年、兵庫県生まれ。重症心身障害の長女を授かったことから、独学で障害児医療・福祉・教育を学ぶ。91年、草の根グループとして「プロップ・ステーション」を発足。98年、厚生大臣認可の社会福祉法人格を取得、理事長に。ICT（情報コミュニケーション技術）を駆使して、チャレンジド（障害者）の自立と社会参画、とりわけ就労促進を支援する活動を続ける。これまでに内閣官房雇用戦略対話委員、社会保障国民会議委員などを歴任。09年、アメリカ大使館より「勇気ある日本女性賞」を受賞。10年6月、NHK経営委員に就任。著書に『プロップ・ステーションの挑戦』（筑摩書房）『ラッキーウーマン』（飛鳥新社）がある。ニックネームは「ナミねぇ」。

「社会福祉法人プロップ・ステーション」
http//www.prop.or.jp

トレードマークのヘアスタイルは、地元・神戸の行きつけの美容院で。

価値観を生み出してこそ、元不良の本領発揮です。私は「日本の不良少女のハシリ」というようなワルだったんです。

やんちゃだった子供時代

私は子供の頃からやんちゃで、趣味は家出と木登り。とにかくじっとできない子でした。

中学生で家出したときには、神戸の一番大きなキャバレーでトップを張っていたお姉さんに拾われて、14歳にして水商売デビューしたくらいです。

でも、そんな私を両親は一度も叱ったことがないんですね。父は京都帝国大学の学生時代、カフェのお姉ちゃんに仕送りを全部継ぎ込んでいたという人で、「俺の娘やから、道外してもしゃあない」と、私を溺愛していました。

母は、父親と長男だけが一段高いところでお頭付きを食べるような地方の旧家の出身で、男女差別を理不尽に感じていたような人でしたから、「お前はいつか何者かになるために、今、少し道を外れてるんや」と、これまた叱ろうとしない。

高校には進学したものの勉強するのが嫌で、「アルバイトをしたい」と騒いだら、母が職安で事務の仕事を見つけてくれました。私はそこでアルバイトを取りまとめる男性に一目ぼれ。そのまま付き合って同棲しました。

高校生の男女が手をつないで歩いただけで不純異性交遊と言われた時代です。それはもう大騒ぎになって、私は即座に高校を除籍。ちゃぶ台一つ抱えて実家を飛び出し、16歳で結婚しました。

「麻紀を連れて死んだる！」

結婚して5年後には長男が、さらに3年後、24歳のときに長女の麻紀が生まれました。麻紀は3カ月検診で「脳に重い障害がある」と言われ、私は両親のところに相談に行きました。